

家庭では何を育てたら良いの？

【家庭の重要性】子どもは「親を映す合わせ鏡」

子どもは、この世に生まれると小さな社会に飛び出します。一番最初に出会う社会が家庭です。そこでは、親の言動や周りのあらゆることを真似しながら学習していきます。身体の成長と共に、様々な影響を受けながら、生活スキルや人間関係などを学んでいきます。子どもは、「親を映す合わせ鏡」であり、子どものあいさつ、生活習慣、言葉遣い、人と接する態度を見れば、どのような家庭でどのような方針で育ったのかが分かると言われています。家庭は「教育の基本」であり、家庭の教育方針（習慣）は子供の将来を左右するほど重要です。

【目標】家庭（子育て）で目指すは子供の自立

子育ては、例えるなら「親どりとひな」の関係に似ています。

「親どり」は「ひな」が卵からかえると、お腹をすかせた「ひな」にえさを与えます。「親どり」は、敵に食べられないように「ひな」の身を守ります。「親どり」からいろんなことを教わりながら、最終的には、「ひな」自身が自分でえさを取れるように力をつけていかなければならないのです。そして、巣立ちを迎えます。

子育ても「巣立ち」を意識させなければなりません。社会に出る（18歳の成人を迎える）までに、成功も失敗も、ありとあらゆる経験をさせる必要があります。社会に出た時に堂々と生きていくために、子供のうちから力を付けていかなければならないのです。家庭での大きな役割は、子どもの自立です。我が子が大人の社会で生きていくために、今、何が身に付けていて、これから何を身に付けていかなければならないかを考え、必要な経験を積ませてやってください。

【注意】溺愛、迎合、放任が自立を損なう。

子どもの自立や成長を促していくときに、親としての気を付けるべき関わりがあります。それは、溺愛、迎合、放任です。これらは、子どもの適切な自立心を損なってしまう可能性があります。

1つ目の溺愛とは、「むやみやたらにかわいがること。客観的にみられなくなることを」意味します。例えば、「私がいないと、あの子が生活できない。」や子どもの

問題であるのに、親が勝手に自分の問題と捉えて、手を出したり、口を出したりしてかばうことです。子供が失敗しないように何でも先回りをしてしまう状態のことです。過保護によって子供は、「困った時は、親に助けてもらえばよい」と学習し、考える力や判断する力が育たず、成長に必要な失敗や達成感を味わう機会が奪ってしまう可能性があります。

2つ目の迎合とは、「相手が気に入るように調子を合わせることで、叱らずに甘やかすこと」を意味します。例えば、子どもがルール違反しているのに、許してしまう。子供に嫌われないようにしようという気持ちから適切な指導ができない状態を表します。子供の機嫌や行儀をよくするために、お菓子や物などご褒美を与えてしまうなども含みます。子どもは大人が考える以上に賢いです。子供は、そうした大人の矛盾に漬け込み、要求や行動はどんどんエスカレートしていき、関係が悪化していきます。

3つ目の放任とは、「干渉せずに放っておくこと、無関心や放置」を意味します。例えば、子供の話や行動に興味を示さず、大事なことを教えないことやルールを守ろうが、破ろうが勉強できようができまいが関係なく、生活リズムが崩れても管理しようとしなないという状態です。子供は、適切な関わりが受けられずに、信頼や居場所を失い、消極的な態度や学習への無気力感、非行へとつながっていきます。

おわりに、家庭の役割は自立です。自分で自分の生活や学習、人間関係をコントロールする力です。親が子供と適切な距離感で向き合い、子供を受け止めたり、背中を押したりして、子供の自立や成長を促していきましょう。

家庭で実践（自立編）

自立する子を目指す 行動5カ条

（行動1）先回りせず、何事も挑戦・経験させましょう。

（成功も失敗も学びとなって成長につながります。経験が子供を作ります。）

（行動2）家庭内、社会のルールは、守らせましょう。

（人間は、ルールやマナーの範囲で、生活します。大人になると、ルール違反が大きな命取りとなります。「ダメなものはダメ」「良いものは良い」です。）

（行動3）自分で選択させ、責任感をもたせましょう。

（自分で選択したことは、行動したり責任をもったりしやすいです。）

（行動4）子どもの話を聞き、すぐに口出しせずに、見守りましょう。

（上手くいったことも上手くいかなかったこともどっしりと受け止めてあげましょう。）

（行動5）他者から視点や親としての期待を伝えましょう。

（困り感をもっている時やトラブルが発生した時は、自分本位になったり、視野が狭くなったりします。新しい価値観を示し、考えを広げてあげましょう。）

子供は親の影響を受けて育ちます。模範を示し、導いてやりましょう。

1人の子どもを1日24時間、365日、18歳の成人を迎えるまで、家庭で面倒を見続けることを考えてみて下さい。たいていの家庭では、子育てはともかく、家庭を維持することが難しくなるでしょう。また、家庭教育の世界だけでは、社会性が育まれにくく、偏った見方や考え方を植え付けることにもつながり、子どもにとっても社会全体にとって好ましい教育とは言えなくなります。

学校の役割

そこで、家庭教育の社会全体で子どもを育てていこうと作られたのが学校です。日本では、義務教育が6歳から15歳までの9年間で行われています。現在の学校教育は、社会の変化や要請、地域の実情や保護者の願いから教育目標や内容のカリキュラム（時間割）が作られ、約10年ごとに改定されています。教員は、学習指導要領と呼ばれる教育目標や内容ののっとり、学校で様々な活動や指導を行っています。学習指導要領には、「小学校の〇年生は、この漢字を身に付けること」や「このレベルの計算ができること」などの内容が明記されています。

したがって、学校では、勉強や運動などができてもできなくても良いという曖昧な指導を行ってよいものではありません。子どもの年齢に応じて、知識やスキルの習得を目指し、考える力をより高め、生涯にわたって学習に主体的に取り組む態度を身に付けるよう努力をしています。小学校から高等学校に至るまで、学校教育の出口と社会の入口を意識して、ありとあらゆる教育活動が展開しています。

溺愛や迎合，放任

自己肯定感を高めるためには、“声かけ”が重要になってきます。親が家庭で「～

ができていない。何で失敗したの」というような否定的な言葉のシャワーを日常的に浴び続けると、子供は、大人の顔色をうかがい、ネガティブ思考や引っ込み事案になりやすくなります。一方、「ここまで頑張ったんだから大丈夫」「～ができるとさらに良くなるよ」「～してみればできるかもよ」と前向きな言葉を使っていると家族や友達に対しても前向きな言葉が出るようになってきます。また、他人と比べるのではなく、自分の過去と比べられる声掛けも大切です。「前よりも～～できるようになったね。」という言葉は子供たちの自信を育てます。

そして、何度も使いたいのが「ありがとう」「～してくれたから助かった」「～してくれて嬉しい」「～をがんばったね」「大好き」という言葉です。これらは、これまでの努力や存在自体を認めることができ、ありのままの自分を肯定する言葉です。

子どもが安らぎや落ち着きを感じられる家庭という場で、前向きな声掛けを日常的にしていくことで、子どもたちに自信を付けさせ、様々な挑戦を後押ししてやってください。

【写真】 校内での一コマ

家庭で実践 （自己肯定感編）